

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

白兔物語

【作者名】

ぼらり

【あらすじ】

魔法少女リリカルなのはA's。

八神家に降って現れた女の子が頑張ります。

0、まっしるな

どさり、と何かが落ちる音。

その音で思考の渦に取り込まれていたはやては顔を上げた。目の前には景気の良い笑いが飛び交う場面の映しだされたテレビ。どうやらバラエティ番組の様だった。ふと時計を見れば、すでに時刻は2時を過ぎている。またやってしまった。一つだけため息を吐き、はやては少しだけ顔をしかめた。

ここ連日のはやてはずっとこんな調子だった。少しでも気を緩めると、思考の渦にとらわれる。そして、考えることは決まって同じ。自身の境遇についてだった。弱冠8歳にしてこの広い一軒家に一人暮らし。オマケに足が動かないという大変ありがたみのない特典付き。何度考えたことだろう。どうして私の足は動かないのだろうか。どうしてこんな私を残して両親はいなくなってしまったのだろうか。どうしてこんなに寂しい思いをしなくてはいけないのだろうか。どうして誰も一緒にいてはくれないのだろうか。

どうして、私は独りなのだろうか。

考えだしたらキリのないこと位ははやての幼い頭でも理解している。しかし、考えずにはいられなかった。どうしてこんなにも他の人と違うのだろうか。私何が悪いことでもしたのだろうか。もしかしてこれは罰なのだろうか。どうして私がそれを受けなくてはいけないのだろうか。誰でもいい、助けてはくれないのだろうか。

そつだ、神様なら助けてくれるのではないだろうか。

はやてはよく本を読む。ジャンルは多岐に亘るが特に好むのが剣
や魔法のでてくる物語で、読んではその世界に自分の姿を投影し、妄
想の中で自分の足で自由に駆け回る。時には空だって飛んでみせる。
はやてのささやかな楽しみの一つだった。そして、そんな物語の中に
は何だって願いを叶えてくれる神様がでてくるものもある。きつと
神様だったら助けてくれる。良い子にしていれば、きつと。でも
。

本当は、神様なんていやしない。

はやては頭のどこかで響いた声を聞かなかったことにした。考え
れば考える程に嵌っていく深みは、はやての気を滅入らせるには十分
すぎて、時間など忘れてそんな思考に没頭してしまう回数も日に日に
増えている。幸い、外出中はただでさえ危険が多いために気を張って
いるので今のところその状態に陥ることはないが、この調子だといつ
かそのうち。

いけない、とはやてはかぶりを振った。またとらわれてしまった。
両の手で自分の頬を叩き前を向く。無理やり口角を持ち上げ、笑顔を
作ることも忘れない。よし、と一息。なんとかネガティブな思考を振
り切ることに成功したはやては手元にあるリモコンでテレビの電源
を落とし、もう寝てしまおうと思いつく。自身の腰掛ける電動式車椅
子の操作レバーを握り、寝室へと向かった。向かったのだが、どこか
腑に落ちない感覚を覚え、すぐにその動きを止めた。

何か忘れている気がする。

はて、何だったかなと頭を捻るも思いつかない。踵を返すように振
り返り、見慣れたリビングを見渡す。キッチンへ足を運んでみる。火
元の確認。違う。蛇口の閉め忘れ。違う。戻り、テレビの電源。違

う。戸締り。玄関。違う。窓。違う、違うのだが。ああ、そうだった、とはやては思いだした。視線は窓へ。ベランダへと続くそこは何時の間か前からカーテンで遮られてしまっている。

何か落ちる音。

それが聞こえたのは確かにその向こう側だった。洗濯物を干すために毎日のようにそこへ出ているはやてだったが、何か落ちてるような背の高いものはなかったと記憶している。物干し竿でさえ自身の高さに合うような位置だ。再び頭を捻る。頭の中に浮かんだ選択肢は二つ。確認するか、否か。わざとらしく眉間にしわをよせて訝しげな表情を作ってみたはやてだったが、実のところ答えはすでに決まっていた。

結構な量のドキドキとほんの僅かなワクワクを胸に抱え、はやてはそろりそろりと窓際へと近付く。自身の体温より少しだけ冷たい布地を掴み、口の中に溜まった唾を飲み込んだ。さて、鬼が出るか蛇が出るか。どっちが出てくなくても大変迷惑だ。あ、結構余裕あるみたいだな、私。なんてくだらない考えを頭の片隅に追いやり、はやてはゆっくりとカーテンの合間から外を覗いた。

息を、呑んだ。

目を見開く。寒気も少し。まず見えたのは足。白くて綺麗な子供の足だった。徐々に上にスライドさせ、その全体像を把握していく。そこにいたの一糸まとわぬ姿の雪のように真っ白な少女だった。起伏のない未成熟な身体。寒いのだろう。震えながらその身を抱いている。腰をゆうに超える程の長い白髪。手入れがされていないのだろう。ぼさぼさという表現がよく似合う。顔、表情は頭髪が邪魔をしていて窺えない。ただ、きつと良い表情はしていない。

はやては冷静に観察している自分に内心で舌打ちし、急いで行動を起こした。力任せにカーテンを開け放ち、窓の鍵へと手を伸ばす。慌てているためか、スムーズに鍵が開かない。ええい、なんで私はロツクなんてしたんだ。普段から防犯のためにしていることにさえ苛立ちを覚え、今度は舌打ちが外へ飛び出した。鍵が開く。乱暴に、一気に、窓を開け、外へ出る。その時、はやてと顔を上げた少女の視線がぶつかった。

まるでルビーのように紅い瞳はどこか虚ろで、瞳の奥の光が僅かに鈍くて。

雪が深々と降り積もる12月の夜。はやてと少女は出会った。

1、やさしいせかい

「おねーちゃん、おねーちゃん」

そんな声と共に襲う身体をゆすられていた感覚ではやては目を覚ました。時刻は午前5時。外はまだ薄暗い。子供が一人で眠るには幾分も広いベットの上ではやてはゆっくりと身を起こす。いまだ年齢が一桁な少女が行動するにはいささか早い時間帯な気もするが、はやてがいまいち回り切っていない頭でまだ寝れるじゃないか、なんて考えていたのはすでに4ヶ月程前の話になる。まだ起こされる側とはいえ今となつては随分と慣れてしまったものだとは自嘲したのは割と記憶に新しい。それというのも。

「おねーちゃん。おはようございます」

「うん、おはよう。ましろ」

雪の日に出会った雪のように真っ白なこの少女　ましろ　と
生活を共にし始めたからだった。

ましろ。そう呼ばれた少女とはやては12月の寒い雪の日に出会った。あの邂逅の後、はやては無理やりに近かったが、と言うより無理やりましろを家の中に引っ張り込み、半ば保温状態になっていた湯船に放り投げて身体を温めさせた。これが火事場の馬鹿力というヤツなのだろうか。そんなことを考えたのもつかの間で、すぐさま自室へ行き、ましろが着られそうな衣服を適当にピックアップした。衣服を置いたのち、ゆっくりと身体を温めているだろうましろに扉越しに湯加減はどうかと声をかけたのだが、返事はもらえなかった。不思議に思ったはやてはその後も何度か声をかけてみたが全て先程と同

様に返事はない。これはおかしい。そう思ったはやては返事がないとわかっていても、とりあえず扉を開ける旨を声にし恐る恐る扉を開いてみたら、やっぱりそこにましろはいた。ただ、どうしたら良いのかわからずに困り果てている様子だったのはしばらくの間忘れられそうにない。そこからややあつて、はやてに気付いたましろがオロオロしだして、はやては苦笑を漏らしながら衣服を脱ぎだす。どうやらご一緒するしかないようだったから。

しかし、共に風呂からあがり、たどたどしく口を開いたましろが言う言葉に今度ははやてが困り果てた。驚くことにましろは自分の名前どころか、何もわからないと言ったのだ。それにははやてが言葉を発すると必ずタイムラグどころでは済まされない何かが生まれる。このときのましろはただの会話すら覚束ない状態だった。ここはアレか。警察にでも連絡して即刻保護してもらうべき場面か。はやてはこんな非常識な時でも案外冷静に働く勤勉な自分の頭に贅美を贈る。しかし、その日ははやてが警察へ連絡することはなく、はやてはベットで、ましろはソファでそれぞれ眠ることとなった。けして眠かったとか、面倒くさかったとか、そんな理由ではない。断じて。

そしてその翌日、ある理由からはやてはましろと生活を共にすることを決意し、名前を贈った。

真っ 白い雪の中にいた真っ 白な女の子。だから、ましろ。

安直すぎるかな、と違う名前も考えはしたが、呼ばれた本人は大層気にいってくれた様で、やはりたどたどしかったが自身の名前を嬉しそうに連呼していた。このときははやては、はたしてこれで良かったのだろうかと一抹の不安を感じつつも、これから始まるであろう今までは違う一人ではない新しい生活に期待を膨らませずにはいられなかった。

それから4ヶ月。過ぎてしまえば短かったが、はやてにとつてましろの教育期間としては十分だった。自身の足のおかげか、はたまた所為か。それを理由に休学しているはやてはほとんどの時間をましろと過ごすことができた。言葉を教え、文字を教え、我が家のルールを教え、箸の持ち方から簡単な作法まで。自分が知りえる「常識」というものを親切丁寧に教えた。そうこうしているうちに出会った当初に抱かれていた僅かな警戒心も何時の間にか微塵も感じないようになっていたし、「冗談混じりに行なった」「お姉ちゃんと呼ばせてみよう作戦」はなんの障害もなく成功を収めた。これにはさすがにはやても驚いたが、正直なところ、満更でもない。いや、むしろ嬉しい。血縁関係はないし、まだまだ手がかかりそうでもある。でも、妹だ。姉妹だ。家族なのだ。もしかしたら、もう手にすることができないのかも知れないとも考え始めていた家族ができたのだ。喜ばずにいられる訳がなかった。

「ほーら、ましろ。また出とるよ」

はやては同じベットの上でじゃれあうように身体を寄せてくる早起きな妹に頬を緩めつつ、もはや見慣れたそれを指さす。はっ、とあたかも今気がついたとばかりにましろは慌てた様子でその幼い両の手を頭上に運んだ。クスクスと笑うはやての目はましろの頭頂部から生える二つの白いそれをとらえていた。

「ましろが早起きなのは、きっとウサギさんだからなんやね」

不思議そうに首を傾げるましろの頭には白いウサギの耳が二つ。音に反応してたまにピクピク動くのはなんだか見ていて面白い。そんなことを考えながらはやてはそれに手を伸ばす。刺激しないようにゆっくりと。程なくして触れたそれに優しく、大切なものを扱うように手を這わせる。暖かい。心地よい体温だ。この耳がけて作り物ではないという証拠に他ならない。

これが、はやてがましるとの同居を決めた理由だった。

本来ならそこにあり得ないものが少女にはあった。頭には耳。腰の辺りには尾。共に人間のものではなく、動物　ウサギ　のものだった。はやてがそれを初めて確認したのは少女と出会った翌日の朝。頭がまだ半覚醒状態だったにも関わらず、そう言えば昨日の子は、と確認しに行ったときだった。眠気覚ましの気付けとしてはあまりにも効果が大きく、久方振りに酷く狼狽したのは今思い出すと少し恥ずかしい。しかし、はやてがその現実を受け入れるのに時間はあまりからなかった。

この子はきつとお月さまから来たんだ。

耳を障られくすぐったいのか、僅かに身をよじる妹を見ながらはやては思った。月にはウサギが住んでいて、何故かやたらとぺったんぺったんと餅をついているとは昔からよく聞く話だ。実際のところ、ウサギなんておらず、そう見えているのは隕石の衝突などからできるクレーターだったりするというのがぼんやりと知っているはやてだったが、そんな夢のないことは即刻捨て置いた。だってその方がステキじゃないか、と。良くベットから落ちるこの子は、こんな調子で月からも落ちてきたんじゃないだろうか。そこがたまたま私のところ。そう、きつと、世界は私が知るよりもちよつとだけファンタジーで、ちよつとだけ。

「優しかったんやね」

はやては胸の中でのいかいなのかわからないかわからない神様と目の前の少女に感謝の言葉を贈った。

2、そこで、あなたと

春もつらら。4月の半ばを過ぎた頃。いまだに満開をキープし続ける桜並木を進むはやては、隣を歩くましろに視線を向けた。キョロキョロと興味深そうに桜を見ながら歩くその姿に思わず苦笑が漏れる。ウサギの耳と尻尾はキチンとしまっただけあるようだった。

「ちゃんと前向かな危ないよー」

わかってるーと短い返事を頂戴したが、多分口だけだとはやては判断した。慣れたものである。この間もそんな感じで鼻の頭を擦りむいたばかりだというのに。懲りていないというか、なんというか。どこぞのヤンチャ少年よろしく、鼻の頭にバンドエイドを貼り付けている愛らしい妹はどうにも注意力が散漫になりがちの様だった。しかしながらこの妹、困ったもので人一倍臆病でドジなクセしてやたらと外に出たがるのだ。まだまだ目が離せないと思っただけはやてとしては同行せざるを得ない。正味を言えば、外出をする様になっただけの頃、外出自体がちょっとしたイベント扱いだっただけは内心で渋い顔をしたこともある。もちろん、おくびにも出してはいない。しかし、足にハンディキャップを持っている手前、ほんの些細な障害でさえ大きな脅威となり得るのだ。仕方のないことだった。

もっとも、今となってはそれは随分と昔のことなのだが。

初めはあまり乗り気ではなかったはやてだったが、気がつけば外出を促すことの方が多くなっていった。散歩だけでなく、最近では自身が通っている病院にも連れていく。さらには、今まで頼んでいた食材の宅配サービスも止め、わざわざスーパーに出向く様にもなった。嬉し

いことにスーパーでよく顔を付き合わせるようになった親切なおばさんや、はやての足に関して根気強く治療を行ってくれている担当医ははやてだけでなく、ましろに対してもかなり好意的で関係は概ね良好である。一度だけ担当医にははやてとましろの関係を問われたとき「親戚です」と説明を試みたことに対して「いもーとー！」と頑なに主張し始めたましろにヒヤリとする場面もあったが、微笑ましいものを見るような目で納得された。結果オーライ。

ちなみに、図書館にも連れて行ったこともあるが、絵本を読んでいるうちに船を漕ぎ出してしまっていた。はやてと違い、ましろは文学少女には程遠い様だった。

ふと、突然ははやての視界からましろの姿が消える。

「だから言ったやろー。危ないてー」

それ見たことが。呆れ半分、心配半分なはやてが突然地べたにうつ伏せになって寝そべりだしたドジな妹に声を投げた。ましろはその育ち切っていない手足を投げ出しながら悔しそうに呻く。ものの見事に転んだらしい。ちなみに躓く様なものは何も見当たらない。ましろは立ち上がる。顔面強打は避けた様だが、泣きそうだ。両膝頭は出血こそ無いものの、打ちつけたのか、色白なその肌が赤く変色していた。追い打ちをかけるなら、先日購入したばかりの可愛いピンクのワンピースも砂利で汚れ、少し残念なことになっている。

「痛かったなー。でも泣いてへん。ましろは強い子や」

よしよし、と頭を撫でながらそっかしい妹をあやすはやて。両方の手でワンピースの裾の部分を握り、必死に涙を堪えるましろが鼻を擽りながら頷いた。

「もつちよつと行ったところに公園があるんよ。そこまで頑張れる？」

砂利によって付着した汚れを手で優しく叩き落とす。はやてが言う。またも鼻を嚙りつつましろは頷いた。よし。はやては片手で車椅子のレバーを掴み、もう片方の手でましろの手を引いて動き出す。あの公園からは確か海が見えたはず。それを見ればましろも喜ぶに違いない。きつと、いや、絶対に飛び跳ねて駆け回るに決まっている。私はそれを見て笑うのだ。はやての頬は自然と綻んだ。

興奮しながら駆け寄ってくるましろを宥めてベンチに座らせて。喉が渴いているだろうから、飲み物を渡してお喋りして。きつと矢継ぎ早に言葉が飛んでくるだろうから返事をするのが大変になる。ああ、写真を撮っても良いかもしれない。ツーショットだ。足の上に乗せて、抱えてあげよう。携帯電話を持ってきてよかった。待ち受け画面はこれに決定だ。連絡用に、と外出するときは念のために持ち歩くことにしている携帯電話についているカメラ機能が初めて役に立ちそうな予感。思わず鼻歌を歌いたくなる衝動を抑え、はやては少しだけ急ぐことにした。

思い出を作る。そうだ。ましろとの形に残る思い出を作ろう。手始めに写真だ。不意に思ったことだが、我ながらナイスマイディアではないか。さすが私。やるな私。スゴイぞ強いぞかつこいいーこれは違う。自画自賛が止まらないが、はやての顔が徐々ににやけ出すのも止まらない。単純に嬉しいのだ。今まで家族、あまつさえ友達にまで口クに恵まれなかった少女は思い出を作るといふ行為が嬉しくてたまらない。いつも一緒にいてくれる妹となら、尚更だった。

ましろと繋いだ手に少しだけ力が籠る。ましろもそれに応える様に握り返した。顔を見合って、どちらからともなく笑う。

「おねーちゃん、つれしょー」

「うん、嬉しいよー」

なんでなんでーと聞いてくる愛らしい妹になんと行ってあげようかとはやては思案した。しかし、対して意味はなかったらしく、すぐに考えるのを止めた。素直に伝えることにしたのだ。この嬉しさが伝わってくればいいな、と思いながら。

「ましろと一緒にいれるから、お姉ちゃん嬉しいんよー」

我ながらとても恥ずかしいことを言っている気がしたはやてだったが、花が咲いた様に笑ったましろがましろもましろもーと言ったことでも嬉しくなった。

「こんな日がずっと、ずっと続きます様」。

3、わたしは

私。それは一個人を表す言葉で有り、自分のことなのだ。

「つまり、わたしじゃないましろはましろじゃない……？」

15時のおやつタイム中に見ていたワイドショーの言葉にましろが戦慄した。はやては慣れたもので、ひょいとクッキーを摘まんだ。今日も平和やー。中年肥りした眼鏡をかけたおじさんを画面越しに眺め、はやては呟く。

5月も後半に差し掛かった頃。はやてとましろは八神家のリビングでくつろいでいた。もはや日課となったつさんぽ、もとい、おさんぽはすでに行っており、買い物も済んでいる。特に通院の予定はなく、図書館はましろがあまり行きたがらない。することがないのだから、くつろぐ。要は暇人だった。

「でもでも、ましろはわたしじゃないからましろじゃなくて、でもましろはましろだからわたしでもあって、でもわたしじゃないからましろじゃなくて、でもでもましろはましろだからましろなの！ ……あれ？」

「うん、今日もましろは絶対調や」

あれあれ言っているましろを眺めながらはやては頷く。何度でも言う。慣れたものである。

「おねーちゃんはおねーちゃん？」

「んー、そうやね。おねーちゃんはおねーちゃんや」

どう答えるべきか。僅かに頭を回したはやてだったが、とりあえず肯定することにしたようだ。「この返答をましろが望んでいるかどうかなんてわからないが、自分が彼女にとって姉という存在であることは否定できないし、何よりしたくない。

「じゃあ、ましろもましろー」

フンッと鼻息を荒くしましろが言い切った。ああ、なんと微笑ましいのだろうか。はやては自然と綻ぶ頬を隠そうとしない。彼女が自分のことを「ましろ」だと、「妹」だと言い切ってくれたのだ。これはもう、アレだ。ご褒美だ。

「ましろは今日の晩ご飯、何食べたいん？」

とは言っても、大したことはできなそうだから、せめてましろが好きなものを作ってあげよう、というはやてからのほんのささやかなご褒美だ。場合によってはまた買い出しに行かなくてはならないかもしれないが、そんなことははやてにとって些細なことだった。恐らく、なんだかんだでましろも喜んで付随してくるだろうし、というのがはやての読みだ。

「おねーちゃん、きょうのばんごはんはおかなさんっていった」

頭に疑問符を浮かべながらましろが確認するかのようには返事をした。そういえばそんなことを言ったな、とはやては午前中に行った買い物時の会話を思い出す。特売日だったらしく、普段よりも比較的安く購入することのできた魚は今も冷蔵庫のチルド室で静かに眠っているのだ。煮付けにでもしようかと思案したのはついさっきの出

来事のような気もする。しかし。

「お魚さんは明日にしようか」

何も今日中に食さなくてはいけないわけではないのだ。ましてや、店員にここで調理していくかい？ と問われた訳でもあるまいし。今日はこのまま大人しく冷蔵庫にお泊りしてもらったところで、不都合はないはずだ。本当に？ 大丈夫だ。問題ない。はやては確認のために一通りのやり取りを脳内で終える。少し満足。さらに言うとはやての頭の中にはすでに別のメニューが浮かんでおり、今更魚を調理する気にはなれそうにもなかった。

「……………ほんとう？」

僅かに期待の色に染まった瞳をはやてにむけて、ましろが問う。はやてはにこりと笑い頷いた。ふおおお、とましろの口からよくわからない擬音が発せられ、その幼い瞳は輝きを増す。なんだかとても嬉しそうだ。かと思えば、つぎの瞬間にはえーっと、えーっと、と彼女なりに一生懸命思索し始めている。あれでもない、これでもない何やらブツブツと言い出したましろを見てはやては苦笑を浮かべた。忙しい子だな、と。

それから時計の長針が4つ程数字を通り過ぎた頃、ましろが不意に声高らかに宣言した。

「きまっちゃー…」

待つてました、とばかりにすぐ隣に待機していたはやてが財布を掴む。なんとなくましろがこれから言うのである。メニューが想像できるはやては、すでに冷蔵庫の中身のチェックを済ませており、足りない材料の把握、いつでも出れるようにと外出の準備、ついでに言えば

先ほどのおやつの後片付けも終わらせている。さすが私、などと自分の手際の良さに痺れてみたり憧れてみたりしようかなんてことは微塵も思わずに、はやてはましろに続きを促した。

「しちゅー…」

よし。はやては頷いた。見事予想が的中したようだった。味といい、入っている具といい、色合いといい、ましろのお気に入りの料理としては群を抜いていることをはやては知っていたのだ。おまけにここ最近徐々に気温が夏に近付きつつあるため、敬遠しがちだったのも自覚している。予想は容易い。

余談だが、ましろは何故か色素の薄いもの、特に白系統のものを好む。衣服にしろ、食物にしろ、だ。はやてと出会った当初からそうなのだが、理由はわからない。本人も特にこだわっている様子はなく、無意識にそうなっているらしかった。同族意識。いや、この場合は同色意識とでも言うべきか。なんてはやてが考えたのは彼女だけの秘密だったりする。

「じんじんはっ…」

いっぱいー！ と、思わず花丸をあげたくなるような元気いっぱいのお返事を頂戴したはやてはニコニコしながらましろを買い物へと連れ出した。いざ、進めやスーパー。目指すは、にんじん。キャベツはどうした！ なんて声は聞こえなかった。

4、であいました

包丁のたてる小気味のいいリズムがましるの耳に入り込んだ。トントン、トントン。それが聞こえる度にましるの白いウサギの耳がピクピクと反応する。隣で包丁を握るはやてはそれを横目でチラリと確認してから、手を止めた。そして、視線をカレンダーに向ける。

その日付を囲うように付けられた赤い丸は微妙に不格好で、添えられている文字もお世辞にも綺麗とは言えずに幼さが前面に押し出されている。はやてはその文字を見る度に自身の心がふわふわと浮足立つのを感じていた。とても、不思議な感覚。かつて感じたことがあるような、とても懐かしいような。そんな、不思議な感覚。不快感はない。むしろ心地よささえ感じており、胸の奥が暖かくなる。

「おねーちゃん…いくつ？　いくつになるの？」

シンクに両手をかけ、ピョピョピョ跳ねるましるが嬉しそうに顔を綻ばせながらはやてに質問を繰り返した。それに対してはやては得意そうな顔を浮かべて答える。

「八神はやて。明日で9歳になります」

6月4日。翌日は、はやてが向かえる9回目の誕生日だった。

「急いじゃなきゃいいよ中々やと思っちゃんやけど、どっちなやろか？」

調理を終え、テーブルに並べられたはやての手料理の数々。誕生日の前日ではあるが、すでにお祭ムードなましるに影響されはやてはそ

の腕を奮つたらしい。普段よりも品数は多く、ちよっぴり豪華なそれを一通り見渡したはやては横にいるましろに確認するかのよう質問を投げた。

「じゅちそー！ おねーちゃん、すーじー！」

期待通りの返球に内心鼻高々なはやてはそうやるそうやるーと言いながら、いつにも増してキラキラと目を輝かせているましろの頭を撫でる。撫でる。撫でる。一割ました。それからややあって、はやてがましろをひとしきり撫で終えた後、2人は隣り合って卓についた。これがこの2人の定位置である。そして、待ちきれないとばかりに身を乗り出しているましろにはやては苦笑を浮かべながら、両手を合わせるように促した。

「ちゃんといいただきますしなきゃアカンよ」

元気良く頷いたましろははやてに習い、両手を合わせる。満足げな笑みを浮かべたはやては一拍置き、その挨拶を口にした。

いつからか当たり前になった2人での食事。毎回がかけがえのない時間であることに変わりはないのだが、はやては今日という日を忘れることはないだろうとのちに語る。

はやては思う。何時ぶりだっただろうか。隣に祝ってくれる人がいた誕生日は。自分が生まれたことを、今ここにすることを心から喜んでくれる家族がいてくれる誕生日は。翌日のことを考えると、いつの間にか忘れてしまっていた不思議な感覚がはやての涙腺を否応なしに刺激する。

「おねーちゃん、じゅーしたの？」

はやての涙に気が付いたましろが心配した様子で尋ねた。しかし、はやてはなんでもないと笑いながら誤魔化し、一連の動作の様にましろの頭を撫でる。その行為は単なる誤魔化しのために行ったのかもしれないが、その手つきはまるでましろの存在を確かめるようにも見えた。そんなはやてを不思議に思いながらも、自らの頭部から伝わる心地の良い感覚にましろは身を委ねた。そうして、2人っきりの少しだけ豪華な食事の時間は過ぎていく。

夜が、更ける。

楽しい食事の時間も終わり、入浴も済んだ。そんな2人がいつにも増してじゃれあいながら潜った布団の中は日中にしっかりと外干しただけあつて、とても気持ちがいい。せっかくだから、日をまたぐ位までは起きてようかとはやてとましろは決めたのだが、これはあつという間に寝てしまつたろう、という結論がはやての頭のなかで自然と弾き出された。ましろの上がりきつたテンションメーターも時が経つにつれて段々と下降の兆しを見せている。

ああ、眠い。

もういいか、と半ば意識を手放しウトウトとし出したはやて。どれ位そうしただろう。何時の間にかましろははやてより先に静かに寝息をたてていた。あどけなさを多分に残す妹の顔を寝ぼけ眼で一瞥したはやてはそつと目を閉じる。きつと、明日は今日よりもつとステキな一日になるだろう。そんな予感を胸に抱きながら。しかし。

「!?!」

不意にましろが飛び起きた。頭頂部から生えるウサギの耳はピンと張り、寝起きとは思えない程に見開かれた赤い眼と同じ方向を捉えている。

「ど、どないしたん？」

ほとんど意識が持っていないかかれていたはやてだったが、ましろとくつついていたためか、ましろが起き上がった際に半ば強制的にその意識を覚醒させられた様だった。

ましろは答ええない一点を凝視している。はやては目線を追った。本棚だ。ここのところ全くとって良い程代わり映えのしない場所。元々、はやては図書館へも行くのでどうしてもという場合以外は書籍の購入はしていない。だからそこに置いてある書籍は把握している。把握しているのだが。

「本が、光って……？」

光る本など置いた覚えは無い。そもそも本が光るなんて話はあるのだろうか。あまりにも突飛つ過ぎる出来事にはやての思考は追いつかない。唯一わかったことは、光を放つ本が何時の間にか家にあつた物だということ。何か感じとるものがあつて捨てずにとつておいたものだということ。

本の放つ光が増す。

あまりの光量にはやては思わず目をつぶった。しかし、ましろを掴んだ手は離さない。そして、次に目を開いた時、目の前には見知らぬ男女が全部で四人。

「闇の書の起動、確認しました」

桃色の髪をしたスタイルの良い女性が発したやけに凜とした声を最後に、はやては意識を手放した。

5、まいにちが、しんせんで

「シャマル、お皿取ってー」

「はい。はやてちゃん、このお皿で良い？」

ばつちりや。笑顔を添えられた言葉にシャマルと呼ばれた金髪の女性は頬を緩める。八神家のキッチン。そこに二人の姿はあった。真新しいエプロンを身に付けたシャマルは足の不自由なはやてに代わり、パタパタという擬音が似合いそうな程に忙しなく動いている。はやて的にはそんなに慌てなくても大丈夫なのにと思うのだが、いかんせんシャマルはそうはいかないらしい。それも仕方ないか、とはやてが納得したのにも理由はある。

「はやてちゃん、ごめんなさい。まだ勝手がわからなくて」

どうやら彼女、いや、彼女達はこうした事に慣れていないらしくかった。はやてはリビングで待機している三人に視線を投げた。艶やかな桃色の髪を持つ女性、シグナム。切れ長な目が凜とした雰囲気醸し出している。ヴィータと呼ばれる少女ははやてより幼い容姿で、居心地悪そうに座っている。目付きはやや悪い。はやてはそんなヴィータに苦笑を浮かべた。そして、最後に八神家唯一の男性のザフィーラ。彼は腕を組み、目を閉じて静かに佇んでいる。その鍛え抜かれた肉体は浅黒く、佇まいからも堅気の人間には見えない。しかし、彼の耳を見ることではやてはその考えを改めた。犬耳である。ザフィーラ曰く、狼らしいが、はやて的には犬耳である。ましろがいる手前、獣耳が流行っているのだろうか、などと首を傾げたはやてがいたことは誰も知らない。

「気にせんでええよ。ゆっくり慣れてこな」

ヴォルケンリッター。そう名乗った彼女達との唐突に訪れた出会いからすでに5日程過ぎていた。

あの日の事をはやては思い出す。と言っても、はやてはすぐに気絶してしまつたためあまり覚えていない、そして思い出したくないと言うのが本音なのだが。はやてはかぶりを振った。気絶したことはどうでもいい。重要なのはそこではない、と。

気絶から目覚めたはやての視界に広がる白い天井。はやてはすぐにここが自分の家ではないことに気が付いた。ふと腹部に温もりと少しばかりの重さを感じてそこに目を向ければ、ましろが突つ伏して眠っていた。心配してくれたのだらうか？ いや、この小さな妹のことだ。してくれたに決まつている。はやては少しの申し訳無さと、多大な愛おしさを込めてましろの頭を撫でる。今だに一人で洗髪を行えない妹の髪はいつも通りの触り心地で、安心感さえ覚えた。

そんなましろの真っ白でサラサラな髪を梳くようにしていじっていると、来客があった。はやてを懇意にしている石田と数人の男性の医師達。さらに、その男性の医師たちに囲まれるようにして佇んでいる四人の男女。白衣を来た人間に囲まれてるから、という理由を抜きにしても、とても浮いている男女だ。はやてはこの四人に見覚えがあった。

本の中から出てきた人達だ。

アレは夢ではなかったのか。目の前の驚愕の事実にはやてはとても驚きたかつたのだが、今直面している別の問題に頭を抱えた。

「え、えっと、その人達は……し、親戚！ 親戚の人達です！ それも遠くの！」

我ながら苦しい言い訳だ。はやては内申でそう思わざるを得なかったが、石田を始めとする医師たちはそれ以上の追求を行わなかった。随分とあっさりしている、と不思議に思ったはやてだったが、彼女の目が捉えたのは後にシャルと名乗る女性の指輪がキラリと光ったことだけだった。

「今思うと、アレも魔法やったんやね」

そう言つと、横にいたシャルがバツの悪そうな顔で謝った。別に攻めているつもりはなかったはやてはその意を伝え、自身の車椅子の影からシャルの様子を伺う妹に視線を向けた。

「ましろ。大丈夫。怖いことないよー」

あやすように言ってみるも、あまり効果はない。その様子にはシャルも苦笑を浮かべた。物陰から覗き込み、目が合つては引込む。この5日間、その繰り返しだった。

「やっぱり、最初のインパクトが強かったみたいやね」

「反省してます……」

シユンと肩を落としだしたシャルに加え、話が聞こえていたのであろうシグナムとヴィータもバツの悪そうな顔だ。ザフィーラに至っては表情からは伺えないものの、その犬耳もとい、狼の耳が先程までとは違って下を向いている。反省していることの現れだろう。

「まあ、さすがにアレは……」

はやては再び追憶にふける。

「主、お下がりに下さい」

病院での一悶着の後、なんとか我が家に帰ってきたはやては唐突にその言葉を耳にした。と思った瞬間、ふわりと身体を浮遊感が襲った。わけがわからない。気がつけば、自身の身体は先程までいた位置とは違う場所にあった。そして、まるで守るように立つ四人の男女は一樣に敵意をむき出しにしている。何が起こった？ 理解が追いつかなかった。どうして、この人達はこんな雰囲気をもっている？ どうして、武器を構えている？

どうして、この人達はむしろに武器を向けている？

「な、何してるんやっ！ ましろに何するつもりやっ！」

人の家族に何をするんだと、はやては必死にもがこうとした。しかし、それを剣を構える女性 シグナム の言葉が邪魔をする。

「主、落ちついて下さい」

「落ち着くんはアンタ達や！」

こんな状況で落ち着いてなんていられるはずもない。はやてはふさけるなどばかりに声を荒らげた。

「勝手に分かっているながら、シャマルに調べさせました。お許し下さい」

「許すも許さんも……っ。とにかく、その剣しまつて！ ましろが怯えとる！」

はやての言葉を耳にしながらも、シグナムは剣を下げようとしない。横にいる先端の小さな縋を持った少女　　ヴィータ　　も同様だった。

「この者は、使い魔です」

「それも、バイパスの繋がり先がわかりません。あなたの目的は何？」

シグナムの言葉を引き継いだ女性シャマルが敵意をさらに強める。

「っ、使い魔……？　何言ってるかよーわからんけど、ましろは何もしてへん！」

だからもうやめてくれと、はやては続ける。こんな時、まとも動かない自身の足が恨めしい。あんなに小さな、あんなに震えている妹を守ることもできないなんて。

「答えろ。童女の姿に化けたところで、騙されはせん」

シグナムが剣を構えた。ましろの震えが強まる。

「やめねーか？」

不意にヴィータが言った。見れば武器もすでおろしている。

「ヴィータ、貴様……」

「いや、主もやめろって言ってるし。あと、弱いものいじめしてるみてーでスゲー気分悪い」

「む……」

シグナムも思うところがあったのか、ぴくりと反応した。シャマルとザフィーラも同様だ。先程までの敵意は鳴りを潜め、どうしたものかと言う空気は漂い始めていた。はやてはそのチャンス逃さなかった。ここぞとばかりに車椅子を前進させ、ましろの元へ向かう。

「ましろっ……」

途中、焦りすぎたせいか前のめりになってしまい、車椅子から落ちてしまったはやてだったが、その勢いを利用してましろに向かって飛び込んだ。押し倒すようにしてましろを抱きかかえたはやてはシグナム達を睨む。

「どちら様かは知らんけど、ましろを傷つけたら許さへんからなっ……」

今思ってもカオスな状況だった。意識を過去から現在まで戻したはやてが苦笑を浮かべる。

「まずは落ち着いて話し合い」

「はっ……」

はやての言い聞かせるような物言いに、相変わらずシュンとした様子の子のヴォルケンリッターを代表してシャマルが答えた。

「闇の書の主としての命令とかじゃなくて、家族の約束。守れる？」

「Jの身に代えても」

キッチンの方まで来たシグナムの紡いだ言葉にはやては硬いなあ、と苦笑を加えつつこぼした。

「ま、これからゆっくり仲良くなってこな。時間ならいっぱいあるし」

ましろの頭を撫でながら、はやては言う。そして思う。「Jの子は本当にごごから来たのだろうか、と。」

6、まいにちが、たのしくて

あれから更に日が経った。ましるとヴォルケンリッター達の間にあつた溝は瞬く間に埋まり、などとはいかずとも以前に比べれば幾分も改善されていた。特別何かあつた訳ではない。ともに暮らした。それだけだった。

当初こそ、シグナムを初めとするヴォルケンリッター達はどこの誰の使い魔かわからないましろを警戒していたが、何時からかそれをやめていた。理由は至極簡単だ。

「ん、んー」

「ん？ ああ、すまない。いただきます」

はやてが選んだ私服に身を包んだシグナムが、ましろの差し出したマグカップを受け取った。こんなあどけない子供を警戒するなんてバカバカしい。そんな理由だった。シグナムは考える。最初に誰が言ったのかは覚えていない。自分だった気もするが、ヴィータだった気もする。かと言って、シャマルではないとは言いつねない。ザフィーラも同様だ。ヴォルケンリッター共通の見解だった。

シグナムがましろから受け取ったマグカップに口をつける。思わず頬が緩んだ。ホットミルク。はやてにそういう名前だと教わったシグナムはこれが好きだった。しかし、ホットミルク自体に思い入れはないのかもしれない。ただ、この家で。ただ、敬愛する主が淹れてくれたミルクを。ただ、家族が持ってきてくれる。シグナムはこの瞬間が好きだった。

「シグナムー。違つやるー」

はやての声が飛ぶ。やや遅れてキッチンから車椅子に腰をかけたはやてと、その車椅子を押してくるシャマルが姿を表した。イタズラな笑みを浮かべたはやてとニコニコと機嫌が良さそうに笑うシャマル。そうだった。親切にしてもらった時は、こう言っただ。シグナムは微笑みながら目の前にいる幼い家族に向かって言っただった。

「ありがとう。ましろ」

礼を告げられたましろは恥ずかしかったのだろう。慌ててはやての乗る車椅子の影へと避難してしまった。一瞬だけキョトンとしてしまったシグナムだったが、車椅子の影からこちらをチラチラ伺うましろの姿を見て、苦笑を漏らす。

シグナムはまたも考えた。こんなにも穏やかな気持ちで笑ったのは何時ぶりだろうか、と。

新しい主に仕える身としてこの世界に顕現した次の日。ヴォルケンリッター達は目を丸くした。

「それなら、家族になってください」

幼いながらも新しい主であるはやての言ってることがすぐに理解できなかった。聞きなれないイントネーションの所為でも、新しい主が腰掛ける車椅子の影から見える兔の耳の所為でもない。純粹に言葉の意味を理解するのに時間が必要だった。家族。従僕ではなく、家族。困惑の色を強めるヴォルケンリッター達。そこから復帰が早かったのはシグナムだった。

「主よ。先程も言いましたが、我々は主のために戦い、そして守護する

ための存在です」

すでに一度、闇の書について、闇の書が保有する大いなる力についての説明はしていた。しかし、はやてはそれを聞いた上で、あの返答だったのだ。そんな馬鹿な。これだけのものを目の前に吊り下げられていて、求めないなどあり得るものか。シグナムはこの幼い主が一度では理解できなかったのだと判断し、恐れ多くも進言することにした。いくら幼かろうが、欲そのものが無い訳がない。そう思ったのだ。

「闇の書は」

「ええよ。さっき聞いた」

ピシヤリ、とはやてはシグナムの言葉を遮った。

だったら何故、と思わず声に出してしまったシグナム。あり得ない。確かにこんなに幼い主に仕えることは、臆気な記憶の中をいくら攫おうと無かったと言い切れる。しかし、だからと言って――

「色々突然過ぎて混乱しそうやけど、よくわかったのは私は闇の書のマスターやから守護騎士一同の衣食住きっちり面倒見なあかんってことやね」

朗らかにそう言い切ったはやては守護騎士達に背を向け、ちょうど背後に位置していた洋服ダンスの一番上の引き出しを探り始めた。シグナム達は顔を見合わせた。全員が一樣に困惑の表情を浮かべている。無理もない。

「ほんなら、まずはお洋服やね。サイズ、測るか」

メジャーを構えたはやてが言った。もはや守護騎士達の視界にましろの姿はなかった。

「ーそして今に至る、か」

シグナムは自然と上がってしまつ口角を隠すようにカップに口をつけた。いつの間にか向かいに腰をおろしていたヴィータから何言っただコイツと言わんばかりの視線が向けられていたが、何でもないと濁す。

「なあ、ヴィータ」

ほんの少しだけ間が空いて、シグナムがヴィータの名前を呼んだ。自身の名前を呼ばれて、ヴィータは視線をシグナムに向ける。

「良いものだな」

「……さっきから何言っただよ」

本気で心配されてそんな視線にシグナムは苦笑を浮かべた。まあ、確かにらしくはないのだろう、と。シグナムは自覚していた。しかし、この久しく忘れていた感情が蘇ってきているような感覚が心地よくて、少し位ならと身を委ねているのだ。

「ん、んー」

気がつけばヴィータの元へ差し出されているマグカップ。ましろだ。恐らくは主の差し金だろうとシグナムは考えた。家族なんだから仲良くせな！ が心情な主はこと有ることに世話を焼く。それが嬉しくもあり、恥ずかしくもあるわけだが。

「ん……」

言葉も少なく、おずおずといった様子でマグカップを受け取ったヴィータ。シグナムはここぞとばかりに口を挿んだ。

「ヴィータ、違つぞ。いついつ時には言つべき言葉があるんだ」

つい先ほど、自分が言われたことだからか、少しだけイタズラな笑みを浮かべたシグナム。ヴィータは一瞬だけ悔しそうな表情を浮かべてから、ましろに向き直った。

「えー、と。その、なんだ。あー、あ、あり、がと……」

頬を赤く染めながら、若干しどろもどろになった感謝の言葉。シグナムは悪いと思っていながらも、思わずくつくつと笑ってしまった。ヴィータには睨まれたが面白いものは仕方ないと、肩を竦めてみせた。

「後で覚えてろよ」

「ちっきのお前の顔はそうそう忘れられんぞ」

ふと、シグナムがましろの姿を探す。ましろの姿はすでにそこにはなかったからだ。どうやらシグナムの時と同様に、ヴィータに感謝された直後、文字通りの脱兎となりはやての元へと向かったらしい。小さなましろはやての元でその姿が確認できた。

ましろはシグナムとヴィータからは死角になっていると勘違いしているのか、それとも意識が向いていないだけなのか、どちらかはわからないがその姿を隠すことなく、ぴょんぴょんと飛び跳ねながら嬉しそうにはやてに何かを報告しているのだった。

「なあ、ヴィータ。良いものだな」

「じつは……」

過ぎる時間は穏やかに。